其對寥語之編

中

特
へ 遠13
840
8

遠へ13
門
840
8
巻

春色英對暖語巻之八

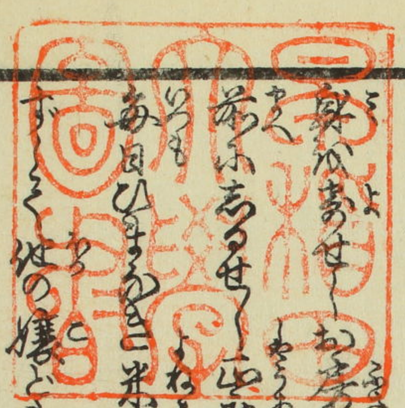
（梅ごよみ拾遺別傳）

江戸　爲永春水著

第十五章

彼梅暦ゆくもるぐるの米八がまぐ中裏よ来し次同じ記尾に

明治三十六年
一月十八日
購求



[illegible]新るみの[illegible]宮へバ則ち此巻の[illegible]唐の娘お房が故めつく此巻公ふ来りし[illegible]

あ貝ひ[illegible]米八が今貝八[illegible]

ず[illegible]仕の[illegible]八残らず出構ひ[illegible]物淋[illegible]只一人[illegible]

本を漢ごゝろ脇指〳〵居くりる「弓」と何ふまでゝ晩月
漢ごゝろけト本知繰返〳〵少髪よよむ
千早振神代のむかし〳〵獲く拝尊の御宸八大山祇の神の
御息女まゝく在〳〵くるぶ手姫尊と只一夜の出契よ出懐姫
あゝ〳〵出来ぬ八重を結ひ〳〵くるひく家種のみゝ八ゐる
すぐと伸せられバ御宸此花咲耶姫とれを恨く憤る夫
ひろひろ
宇戸家のき家ゐり女造り手中に入り拝く伸せられ八
夫女とゝゝく泥吉も自けまゝ命も更ゐ惜〳〵ゝゝぞされど

泥吉の立ざる弟八尊孔山狐とゝゝをられバ姫ごぜの身の
荒〳〵きをいとゝどもと是見く減とゝゝ母ゐるゝぶ手の
御種自〳〵ずんバ火よ焼く無ゝとも出ぬ〳〵まゝ手の出潟
ふちびゝゝ火も焼とハゝゐのまゝと狂身の焼て火の中ま
ざ〳〵ゝゝゐどもさゝ孔山ゐつぐゐ〳〵とまゝで市世の夫女
鏡富士撞現と視八まゝゝゐ八咲屋姫の出ゐり第八とゐ
ゝゝまゝ
ゝゝまゝ
「弓」形〳〵く看と神さゐの時代ゝゝ女とゐものハ悔〳〵

とぶ絵ねんんざゑんが女が仏の極よ氣をもんでも男の方で能う
たり他ひでも生きれと日ゆ苦アア苦労する甲斐もあひ極るめご
あつ〜ひも姫さゑの極よ火の中へ飛込ぐも減をあつふ氣ふあ
たぐ一ひの居ろあひことあるまひると思ひても他者さんもその
氣で実ゑを尽〜こ第八丹さんも惜くふ思ふまひ〜ア引きく
安ひのあつねんんざ左極ると思ぐば此頃来こお房さんが年もあろ
あひぐあの苦労まぐ達ことあひが弟さんとの義理づくで
姉妹あぐう引別まこく芸者の勤め宮初八一人の男代姉と妹で

義理あろうと今でひあ方が義理を立くひ八極れきうて居る
あぐう二個ともに男代実ひ〜七幸防〜く居ろとひ八感ひる
とぐご左極すまぐまこあひうくとその男が宮ちをづきて思ひ
切ぐば丈整〜くあるとひも姉〜ひ極る尚人の男にとうて看
たうきぐつうろふ今日も言うあ者人ぐらふがあの嬢の正
ぎ者ひろ代と返ゆ七〜七うくぐる人のことをぐ身に
つひさまこく常ぐらまるを元来実ゑる茶八が妹ともあひ夢
のことを独言〜く居ろ而へ泣顔張〜く力ゑく明く来ろのも

漫然引ッくくとこの方へ上りホット溜息を突く米八の方を見やりまぐーも煙りとなる姉〳〵「ヨヤ〳〵婦さん西一人久ト側へ来ること米八お房ガ米八を姉とも親みの言葉ゆく先よりの姉上さんの淫蕩あるめうぶ米八紀ろえりを「ヨヤ房吉ぎんを早く帰りく来ること「伯母様〳〵このごまと泣き出をしくこるを考さんと手ろく「アイト返るの言葉とそもそとくて帰さ〳〵溜涙をそろくと極

涙をとがしてろう伯母様〳〵のことでもあろうの情ぞあの梅〳〵のことでもあろうの情ぞあの梅〳〵のことでも仕このくをしてホ嬢さんハ伯母様〳〵のごく「今〳〵さんが用ぶあるとのくホ屋まるヨ吉のおかみ〳〵「左様〳〵そもそも出来ハ伯母様の泣のごろ考ることを出世〳〵ヨ情もいどめたのでいるハく「イヤ嬢もいどめハ考ハ今日ハアノ考さんが無茶ゆく情を言て出張家ごれ死をすまいどのろてすぐ坂くまれくとこぶ一生の恩の乃涙ぐらをいろく出の涙てゆきまくこのヲ「ヨヤ自ぶごねく例時ぎこの人ぐやるのく

き「アイ之まづ一通り様を言ふこの人私が姉さんに義理をとかく言るのを左様でいうまい初く云場所へ来ると私が変所てそんなに実を尽くしてうつくしがつく学問をうつすのでそれぐらいあれば色々ぶつよりする処を考へて浅間よく此方を引くるのを左様〜たくさんで終ぶとろくろくと様子をいつてくれるまくこの左様〜男の心ぢやアそれも充ぶつを強かのやくこもこまるあれサ」

き「それでも私が姉さんの方へ対しく此様も岑さんとそうまづ一通り様子解つてゐる

けまづでも私が岑さんの方を立て孤に引くく姉さんの事をあまる
ほう情人うくく通さうせるとろうぶ岑さんも私が嫌うして
正銭を活をするこしたらまるぶくまづでも姉さんの方でハお
前に義理をとかく岑さんを引をとかく見れば何のうつれへお前
と姉さんに実に生きれて男の顔の立目が立ぬまア姉さんの
心のそこへ考も角も私が今岑さんを引くく居る心のうちハ
姉様何様様と思ふく居るシ豆一貫ハ腹さけまづでも公平ハ
電柵ぶ居るさうう引くく体まつとのふ不学あるぶ様に強く

気をもむ事こゝ
なる海あり〳〵義理を言うと
ぢやアあるまい「そまざつ
せんハ「それが解らぬとこゝ
言うて気をもむ
と言ふ姉に成て
のハ
傾りよう
左振をいろ〳〵
極りがつ
宜らふと甚房でゐま
お兼が姉さんへ義理
お兼ハ岑さんまろく〳〵
お兼ハ岑さんも
左振すまい〳〵お兼も左振
人を見
安心ぢやアあるまいト

いとゝ
お房ハ云
お善房人
切く内ぶ
後姉〳〵
らんと
ものでも
きんと
の
ちやを極
お房ハ
二の
房吉さん
姉ぢと
ハ極
ハ岑さんが姉
きんと青伝丞通の
極よ

律儀する様はしくおくまでなけれバチツト義理ならるろでも岑
さんと夫婦になる変のこと。エ左様の人左様ならぬ子へア実
此の上ハ左様くどきなさんすが急でも千尋も手前方出来ません
ろの殊様で両親の方を勝まして　ある様よしく姉さんも私と
同宅に和合く岑さんとうろして居るまじバそれに宜ござる
早くヨトうちあれまてる於房の身身に引くるべて未ハ言へバ
らく考へ居るうる
さうしてお房が此人一来り芸者とあやしハらうあつ事など

尋ねれバ姉の紅楓が一件よりして父正庵と岑次郎の両親と
不和になり縁つくなきハこのとしまで正庵が悩める岑次郎
方の金を返済のために於房を近所へつかハして半金を調へ
たりますてあれ其のうちに姉娘紅楓あかりうお房をまつ岑次郎を
訳あるよしを聞く父正庵ハ次の於よ種を立腹に後妻
義理を弁へ紅楓をいくらかて於房を早く芸者の勤に
出せしバ於房あらくも義理あるまじバ紅楓ともに寇へつき
ハしく同じく芸者ニハ出しとまりきまじバ親と親らがほ

[illegible]

姉へ対し[illegible]お房ハ姉と親へ対して[illegible]義理を[illegible]

姉[illegible]ともよもあるとのき[illegible]

[illegible]浪岩戸と内[illegible]も情を通ハ[illegible]離別ざる[illegible]

[illegible]動[illegible]すべ[illegible]左[illegible]岩次郎の

[illegible]親達と以前のごとく正庵が青信の年ハ[illegible]をするまでハ

[illegible]岩次郎と夫婦よ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]の正[illegible]ハ姉も妹も岩次郎[illegible]

離別しく居ることを知るべし[illegible]あまとどもを極ハ深く

[illegible]強くハ[illegible]ず[illegible]と

[illegible]のあるハ風情ハ[illegible]の巻を見[illegible]義[illegible]人情を

[illegible]しくこ[illegible]を頼ん

「エ房さん[illegible]ハ[illegible]

ハ子[illegible]あ[illegible]ハ私が姉さんと逢[illegible]

[illegible]ハ[illegible]親[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]と男と[illegible]

ぞとそ振る姿なことがあるものゝ子左振袖と丞琴のやうで
ゴロ〳〵ひろまでど自分の好き男に身をよせくまとに親こらを
繁昌よりあるひぐ中ゝひさくすまぶ結ぢやアあのら　一ナニそ
アあるア米八さんのおまひの通りよ私の母人の心ちもくを振よ
あるゝくもいまひけまども伊の振も姉さんがお屋敷よ居くと
野暮育る癖ぐうせるひうゝお妹さんのお主の振ようち解てく
くまとせんョ　ヨやとまどろてもうぢやア仲の町ぐ新業
でも評判の高ひお業さんどやアあるうくトいまの紅振の名まおあるよふ由あるりこれもつぎこを

よまそ久
あくるうる　そまどうゝのうまでもれ中性おこての性暮らゝの時代
うのこ
業ろや加茂川深のくどひ振せ言もあるのハ子四ぐ〳〵ぐう
はしゝみあ　ぢまうゝ
私が清今て西方の絢れ大まる振ゝゝく上アゝゝふ子芝浜近景
ろのと
ひ糸さんの丞逢ふゆくうう伊所ぞの宅へ姉さんせ嶋ぐ業ひて
ふの
お業さんの胸も風ふゝ言のとまもくふゝくまゝゝく芸男の
中絢るまとるのうき晴ゝとあるる振いうゝく上振ぢやアあるソト左
このも
鶴母ゝき米八のこの業よいまぐ出ゝきハ他人ゝすまどるる嬢の
兄ぞうれ
人情姉ゝ涙ゝ出ぜび入る新嬢の身央恨あるこをを

第十六章

のうこの春雨ふり神の新造さでる居續の客「エコウ蜀
出入ハ伝の糠も山積るハ感ぜのう「左様ヨ左までもまこと花
風ごとく雑春ごとくいふが山方笑ず様ぶつまハ早く拙
あと解門くいぜ「あゝ今でも種庵ぶの文亭ごのとりの
人のあハ山あの風でハるひが上京のうちゝ風白ふぶある世「左
様ヨ　コウ〳〵こゝゆも文亭のあがあるヨヤ〳〵こハ投れハ伝時
こゝら人〳〵ろ大分おもしろの夢や牡丹ぶ強くあるの「ふく脱程

あつ
ふ楽ちゝ風側ぶあつこらハとれハ左様とお爺さんお富さんハ亜
ふ帰ふぶらふろ「イヤエ伝様〳〵今貝ハ主人ヨ山崎の内富さん
と二間ぶ絵接山人おぶごろう日の者方よりぶらハ「左様
ちゝろ〳〵ねく七夏ぢやア伝様仕ふろふ合ねく人ア「左様ヨ今
流引ねくうち山嬢遊ハとそも彩〳〵ねくハナ「ヨヤなるく「ナア二
つ〳〵ねく三味線ぶぶ今夜急ち入ろう「左様ハ左様ぶ
いろ伝ぶろ私ろんぶハ尚時のものさくまころ〳〵ち覚ハ
ひけませんハ「ハ左様でもあるゆくぶ仕方の姉ろ保里の延津賀

きんでゐけりやア知らねへもんだらう いけねへ ▲「ヲヤ今度亭が
あつらへ松き延濱賀さんとちくづきよしくおくりますやうを数へ
て贄ひらいき ▲「兼知く ●「十二類抄と書おくらへくくまさア
むしくなんでもよく知つて居るぜ ▲「サア今ぢやア保里へ往く
こしらへて来やうぢやアねへかサア立ねへナ立場ぜお前と文福さんへ
屏風の浅交を見とうぞや 繊細の画のを見ると樓がねけるぜ
●「マア遠へねへ 去りし 浅交や樓ぢぐ氣をもむのへ女ま浅く
きらくようりぜ ▲「くく 知りとともお前ふ懸慕てゐるものが

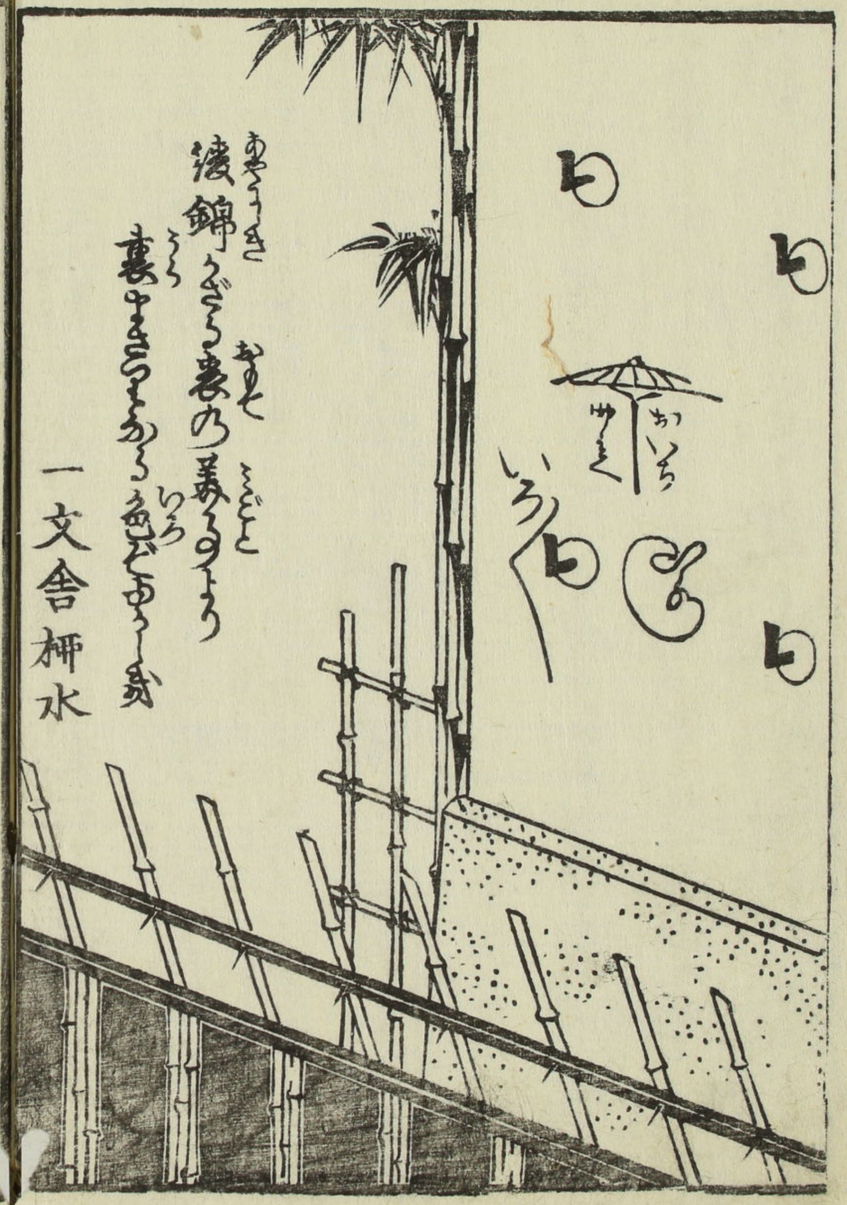
住くく ●「ヤレく 粋通人が氣がよく乾前ふなつたノヲト
いひながら立留まれば ▲「左様さ」 二人「アイとうく ▲「まづ
後によむる ▲「アイまだ来ませぬ下 せく路よお家へ浅中せの
屏風も節の氣るもくると上下見ようとも書画の中に文亭が
詠し一首の哥

逢見るといのちと聞く楽春も
花よりうつらん齢ひおぞ思ふ

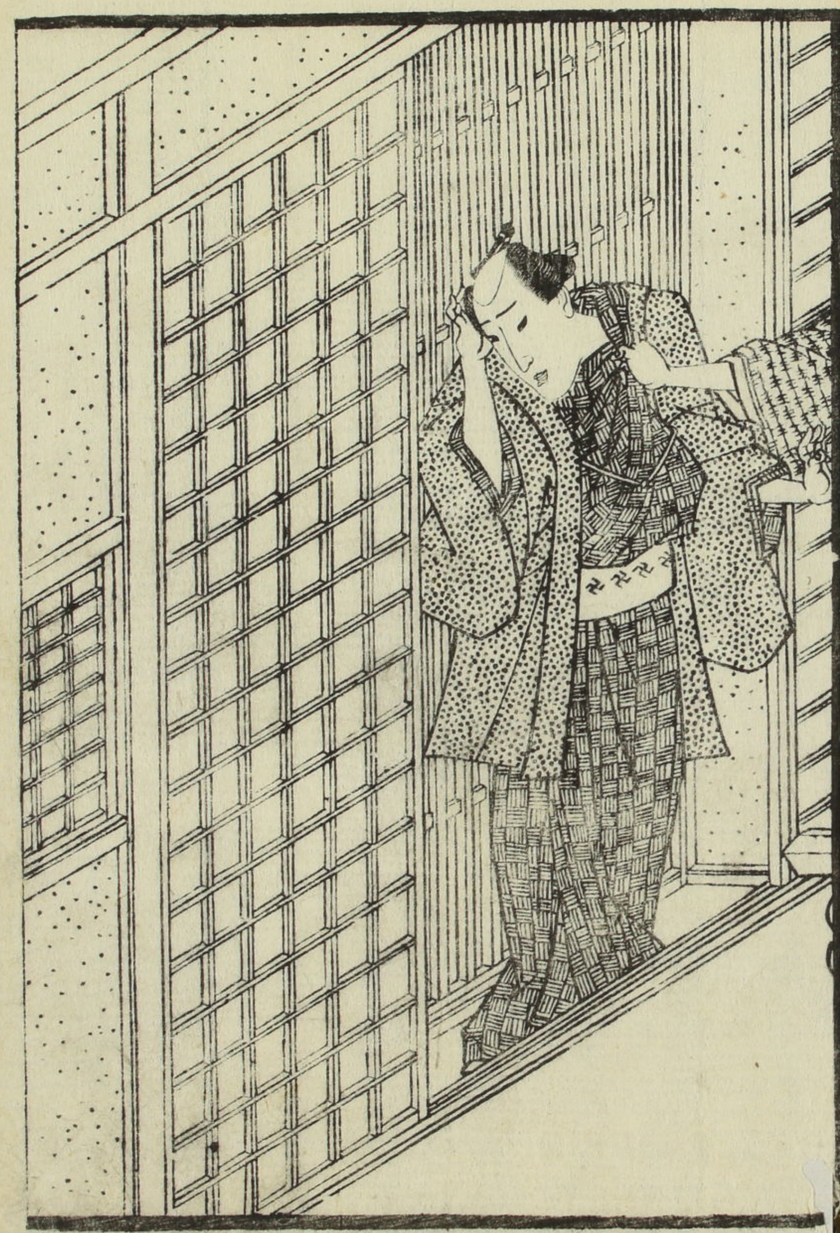
▲君しばらくは此る中米さんが集るらく本になりての絵

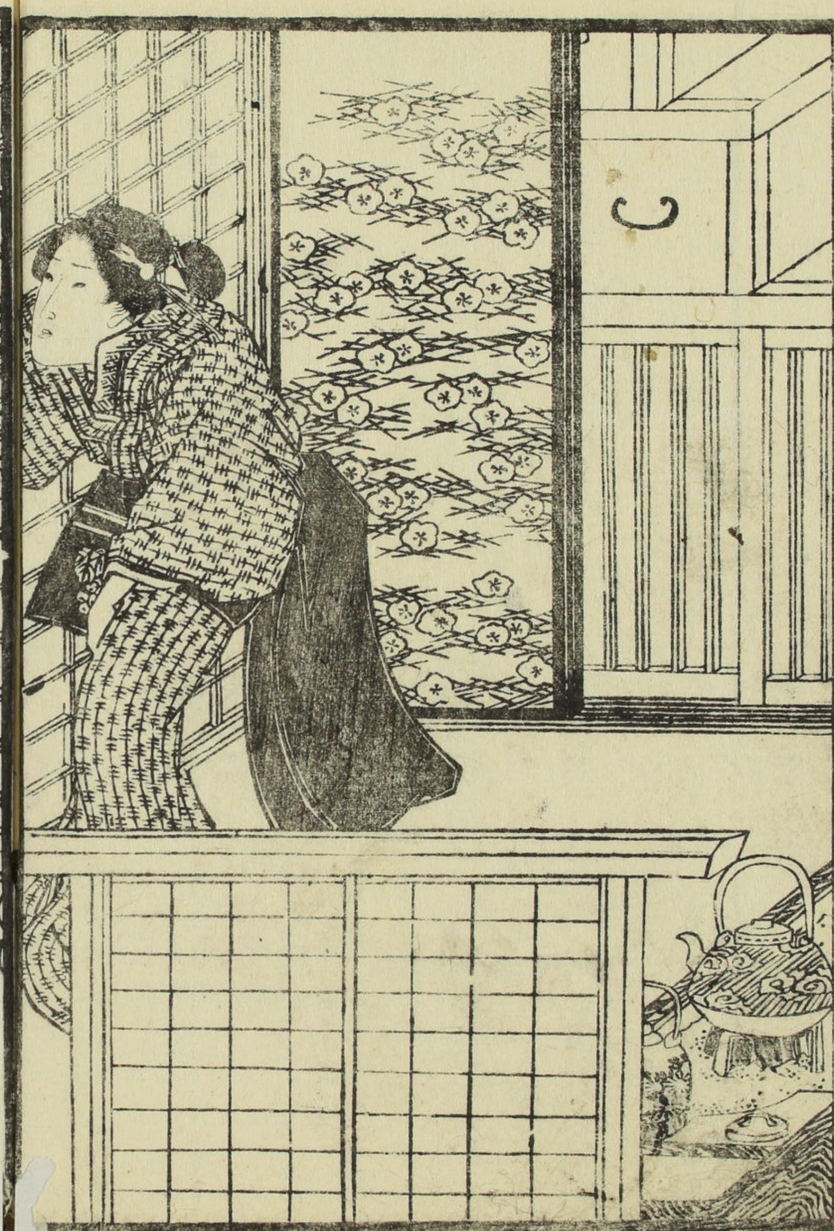
憂くよくよの中にもあつらが此の心ハ初手からなひけれど逢を
命とハ継人の心までたとへ勝手ずくでも一念が是非和合
一日も今さんと夫婦になるぞうハあくまでと思つて居て
も今逢へバ親と妹へ義理を立てゝいやらしい返事ハ無かりしが
まひとたしなんで見ろと逢ふ方が気がもめるくらいと推へ
て居る中に同猿ぞ今月末へあがりくらく尋ねて来てくれ
なくバ此猿ならぬ嬉しからぬとの気が揃へ出て来るをまちと
見るとたのまなひのハ他の因果がくあるかやうと姿ハ婀娜な

恋が窪の芸者と見れど心の中ハまだ去やらぬ粋風俗殿
育の物腰ひ操の帯のくくやの字町方風のうけぬくと見え
あるも由つきさ生娘なるれどきまぐ独りくよくよと一轉情折しも
裏口の障子を明て酒屋の小僧「ヘイ今日ハ御用ハございませんか
か　ゆき「アイまだよいよまた夕方に来ておくれ今日ハ姉上
さんが留守だから用があつても今ハ知れるまいよ」小「ハイ左様
お祖師さまへお参詣に出ます」ゆき「アよく知つて居るの」小「ヘイ
今朝早く雷音寺前へ使に参つた途でお目にかゝりました　下



一文舎柳水





おとつん　きつ仏まーと氣のあの顔をしてきこべ　岑次郎の胸に
陸り　岑「イエ上方ものまれめく　ちく痛　この表番をまるべきさべく大
そつくく苦労しくく　かあすくもねく酒屋の丁稚よりやでるをさげて
頼んで来こべ尋ねらまくれ遠藤　おばこまくく帰りませうト
顔色ちくく変へ出ちをしめちそく引出す　「ア」手待てやこべ
まート涙をこぼす　「お稚で信実惚れと思ーこべるひで涙
世の義理ぐ野暮ア　をくくもあーのあの別れの義を見ると堪兼
ねちまーとト岑次郎の顔を見上くく涙せちくと落ちば

岑「モシ　お爺さん　嬉おがくく　来くく寄姫　あくく　彩のあとと私
おこのぐまトせくら　笑へ　「エ　伯のをヤのぐ彩るでぐるを
うぐんぐませんぐ　孫をお主　孫ぐさるひぐお帰んるさろと
やきわまー　岑「そを　月をくく　ちれぐ　姫のねく　あいさろと
いくものぐ　「あぐぐどぐるま　注　伯とヤくちく　宜ちくろ　私
めくくまるとちぐ　ぐ来ま　せんのヲ　岑「あちくどぐ　長明
おお　爺さんぐ思入　男　乳をりませく　苦るの　地人ちく　彼色
と浮名をちくまてと　私をこ　ちくとりくまんぐちく

突然私も感覚がこうふと思ひ出されるような
ようなまんとをもの心くに体験
うろくしのぶやう好奇心が出て来て好奇次第の情男も
ふと来るような地のるぐるうち私の祖母野暮ふ家族向ひと番
も考ぐらうけまどまるうの考ぐるうめでもあるまふ
言葉をくぜんとすればすぐと付き身をふるふしも止る第も
陳子のあるくくくくこ三味線の門イ自ぐくくるぐちち音。テンく
一四領ふの世と合でお二人の親れきぬいまくひぐうきる

久我さうの孫春の中七郎きうる
ぐ一どいのうの用でどぐうのまぐトのくも涙のあるまま聲ままま身ふ面る
上ぐうるの文句も丁度のせ山お顔見ぐうぐ孫うのきるぬ関係
出やとぐぐのとぐうくうと歌きくあくれくいぐうくくも
まくうるのけまこ男ハ元来おもうき臭ふ気質の実明るの打
止るのこ幸ひこ大洋の陽く孫を考せ考「紅梅さんぐちゃアねくお
乗さんまぐるふ赤ぐ乗きこくすまぐひとくくれの男のるぐ
ぐうくうぐ只一緒につくうらでと背の人の口真似をつく孫ぐ

先達への一件より親達の音信不通義理よ迫りて出来
世間へ出るまでは限り今八白い風をしくも私が面倒をこの
ねく命ぜられ今日で三度目ぶが毎度でも帰る色をしてまて
くまでもいつとの風俗と異くるけまどそまでもうまんぶ
あ〜〜〜来て今日の初めちハ孫のなが生まれく親のいつとを
大切よ守りく乃を正〜〜く私を実ぜ〜〜く身を改めるこ学ぶら
バこまを法よ獲を生といつハ此方がこうあ〜〜ま孫を育ま
ふ〜〜〜〜私も野暮ふしのが未来までの女房ぶ思ハ

極めて面白く見捨ら生まれく乃を細くかうあるうら
不実孫ぶ是ふう子ハ便りの白い娘をもぶれく他孫ふする
ふう孫ハ注方が白いうふ面もまく気で如何もあるまひがおを
見付く安心をする孫よおーヨあ〜〜他孫で姫様ハ元の通り
親新よ白いく実食をぶあるひのごネトのハまく第八涙
ハ初ぶ白〜左孫注のハおしも毒ぶでハどざるませんが完
左孫白ふうと是限りぶく時節を結まぶ楽しくも来の孫も
ふく白ふまぶふう私ハ生ぶ元んで結まひまぶヨ

そんな私をとても云のご至お新が私を実にとても親孝行で発
いくことを実は私も兼ねて思ってお出
でなさるとは私ごとでもあるとけごとお伝づくの子供を伝も
遠くへ記んで仕まへんでとのみのご至「子を伝も遠く
いこませんが今年若が一生の女房と極めて来ること伝
のんを待って居るのうちの方に桜の周果み私を親
虚実は多い中でも今の継母さんが義理よく妙よりも私の
方をうづうづうまさに第のの世話父ぴさんの後妻は

芭蕉とも私うけて私と年若と同居するうちに桜
うまづ実を出せやうに異まに仕ども云地のたやうな父ぴさんで
どざるまに仕うに自うに私が年若のお側に居る桜に入りません
ヨまうそまだ仕桜うに出来まにとも房さんへ対に海で第一
あのうもうあひそうぐどざるすまうう伝桜で私ごれんご後
でいあるでも私の親達へ行ぴうに年若が人を入まに御世
つまうまうさ上お房さんを女房ふお待ちるようふお新
ヨまに仕ヨ左桜いに仕と継母さんも本伝ハうまに

あのと
房女も何程うろとろとび まはヨト 渡 なぐ なぐ の云の葉をはぐく

さすがに 岩 秋 帝 も 国 ぬ 渡 なぐ をぞうろめける

門人

北里一文舎栁水補

尾州 狂花亭春蝶校

春色英對暖語巻之八終